

実践報告 (Report)

# 新設保育園における保育の質を確立させるための研修の試み

—— 2歳児への生活場面での援助を事例として ——

**A trial of teacher education and training for improving quality of child care on a newly founded nursery school: As an case supporting in daily life for two-year old children**

小林 豊子\*・杉浦 美紀子\*\*・松本 由美子\*\*・石橋 尚子\*\*\*  
KOBAYASHI, Toyoko\* SUGIURA, Mikiko\*\* MATSUMOTO, Yumiko\*\* ISHIBASHI, Naoko\*\*\*

キーワード：新設保育園，乳児，研修，保育の質，人権，保育士の力量

Key words : newly founded nursery school, infant, training, quality of child care, human rights, ability of nursery teacher

## 1. 問題の所在と目的

梶山女学園大学附属保育園は、平成27年4月1日に開園した0・1・2歳児を保育する乳児専門保育園である。本園の保育対象となる乳児は、児童福祉法では「満1歳に満たない者」と規定されているが、保育所においては0歳～2歳までの3歳未満児を乳児と呼びならわし、その乳児を対象とした保育を、乳児保育として一般化している。「児童福祉施設の最低基準の設備及び運営に関する基準」の第33条第2項で規定されている保育士の配置は、0歳児3人に対して保育士1人、1・2歳児6人に対して保育士1人である。3歳児20人に対して保育士1人、4・5歳児30人に対して保育士1人を配置基準とする3歳児以上とは異なり、乳児保育では、保育士配置が手厚くされている。

それは、乳児期の子どもたちが、感染症にかかりやすいため、日常の状態の観察を十分に行う必要性があること。月齢による個人差が大きいことから、家庭と連携し、個々の子どもの状況に即した保育を心掛けなければならないこと。また、歩行の獲得に伴い行動範囲が広がり、探索活動が活発になるので、事故防止に努めながら活動しやすい環境を整えなければならないこと。そして、言葉が未発達である子どもの気持ちを丁寧に受け止め、自分でやろうとする気持ちを尊重し、さりげなく援助することなどが保育の中で求められるためである。このように乳児保育には、子ども一人ひとりを大切にする視点が特に重視される。

本園は新設であるため、保育士間で目指す保育の質について共通理解を図ることが早急な課題となる。この実現のためには、保育士の研修制度の立案と、研修内容を保育実践に反映させることが求められる。そこで、本研究では、子ども一人ひとりを大切にする保育を目指して行ってきた園内研修と保育実践の一端を報告する。

\* 梶山女学園大学附属保育園 園長， \*\* 梶山女学園大学附属保育園， \*\*\* 梶山女学園大学教育学部/附属幼稚園 園長

## 2. 子ども一人ひとりを大切にする保育とは

### (1) 名古屋市人権保育研修からの学び

本園の研修計画を立てる時に、市内の民間保育園が参加できる名古屋市子ども青少年局保育運営課の研修会への参加を考えた。その中の人権保育研修に参加することは、保育士間でひとつのテーマで話し合うことができ、目指す保育がイメージしやすいのではないかと思ったからである。

名古屋市人権保育研修は、子どもを尊重する保育内容の充実を図るために平成22年より行われるようになった。その基である平成17年作成の『名古屋市人権保育指針』の中において人権保育は、「豊かな人間性の基礎が培われる乳幼児期に、子どもがかけがえのない存在として尊重され、愛されて育つことは大きな意味があります。自我が芽生え、自己を確立させていく時期に、一日の生活の大半を過ごす保育所において、子どもがじっくり丁寧に育てられ『大切にされている』と実感することこそ、自分を信じ、人を信頼する第一歩となります。この営みが人権を大切にする保育」であるとうたわれている。人権保育研修の趣旨は、人権保育の実践、交流を通じ、保育内容の充実と職場の活性化を図り、保育園全体で保育の質の向上をさせていくことである。研修方法は、公立園は各園15年目以上の保育士が1名参加する。民間園は希望をする園の保育を統括する保育士が1名参加する。研修生は各園で人権を視点とした保育実践を行い、約150名の参加者が20グループに分かれて討議をする。また、公開保育該当園の保育を見学する。その評価反省を参加者で行う。園内研修の充実のために研修生は、各園のリーダーとなり、人権保育研修の計画、実践、公開保育の議論を進める。

本園では、人権保育研修を受講する前に、保育士間で『名古屋市人権保育指針』を読み合わせた。この指針は「人権尊重の理念の浸透と人間性豊かな社会づくりの必要性が高まる中、子どもの人権に関する国内外の動きや、今日の子どもの人権をめぐる状況や課題などを明らかにしながら、すべての保育所において『人権を大切にする心を育てる保育』の推進を図ること」を目的として策定されたものである。その基本理念は以下に示す通りである。

#### 人権保育の基本理念

- ・子どもを権利の主体として認め、豊かな関わりの中で、お互いの人権を尊重しあう子どもを育てます。
- ・一人ひとりをかけがえのない存在として尊重し、生きる喜びと生きる力を育て、自分らしさを発揮し、表現する子どもを育てます。

以上のような人権保育指針を通して、私たち保育士は、以下のような感覚を育ていく必要性を理解した。つまり、子どもは、人として尊ばれることにより、豊かに成長していく。そして、大人との関係を土台として、周りの人間に対して自分と同じ側

面があることを知り、自分も人も大切に思う人権感覚の基礎を乳幼児期に培っていく。

次に一人ひとりをかけがえのない存在として尊重するとは、子ども自身が大切にされている感覚が持てる保育を行うことなのではないかと考えた。そこで、子ども自身が大切にされている感覚を育む保育士の具体的な関わりについて保育士間で話し合った。その結果、見えてきたのは、子どもを大切にすること、尊重するということが、イメージはできるものの具体的な言葉で共有されていなかったということである。子どもを大切にすること、尊重するとは、子ども一人ひとりに合わせて保育を行うことではないか。保育士間で具体的な関わりを考えることで共通認識を図った。子ども一人ひとりを大切にしていくための8つのポイントを以下の通りに話し合った。

1. 保育士の思い付きで子どもを動かさない
2. 子どもを呼び捨てにしない
3. 子どもが不安になっている時に視線を合わせる
4. 子どもが求めてきたときにはスキンシップを図る
5. 子どもとはこういうものだと思いつけない
6. 子どもの言動を否定的に捉えない
7. 子どもの気づきに共感をする
8. 子どもの気持ちを聞くようにし、受け止める

これらを実行するにあたり、保育士は常に、自らの人間性や専門性の向上に努めるとともに、豊かな感性と愛情をもって子どもと関わり、信頼関係を築いていかなければならないことが確認できた。学んだことを意識しながら実践の積み重ねをしていくことにした。

## (2) 園内研修からの学び

実践に先立ち、保育カンファレンスを行い、子どもたちと保育の現状と問題点を出し合った。以下の①～③にその概要をまとめた。

### ① 2歳児クラスの4月時点での子どもの状況について

- ・新規開設園のため、12名全員が新入園児である。そのため、保育園生活に不安を感じたり、落ち着かなかつたりする子どもが多い。保育士との信頼関係を築きながら、興味が持てる遊びを見つけれられるようになると、徐々に安心して過ごすこともできるようになっているが、場面によっては不安を感じたり、落ち着かなかつたりすることは続いている。
- ・物や場の取り合いが多く、押したり、つねったり、噛みついたりすることが増えている。また、周囲のざわつきや泣き声等で落ち着かず、友達とトラブルになりがちな子どももいる。

表 1. 平成27年度 相山女学園大学附属保育園 園内研修計画

	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
人権保育研修 スケジュール		グループ打ち合わせ(9日) 課題1・2提出 園での取り組み			課題3作成 園内公開保育 2歳児(3日) 公開後課題4作成	第1回公開保育 (27日)	園内公開保育 2歳児(18日)	第2回公開保育 (8日) グループまとめ		
園内研修計画	・職員会議で提案	・人権保育についての学習会を行う。 ・エピソード記述についての提案をする。	・月の保育反省で人権保育の視点から報告をする。 ・エピソード記述を出し、ケース検討をする。 ・園内の環境を見直し、必要に応じて改善する。		公開保育 2歳児(3日)	公開保育 0歳児(8日)	公開保育 1歳児(17日)	人権保育研修2回の公開保育を終えての報告をする。		園内でまとめをする。↑

- ・生活面では、保育士が促しても身の回りのことをなかなか行うことができない子どもがいる。

## ② 保育の問題点

- ・不安で泣く子どもや、友達とのぶつかり合いが同時に起こることが多々あり、その仲立ちをゆっくりと、ていねいに対応することが困難な場合がある。新規開設園のため、これまでの保育の積み重ねがない。保育環境（保育士も含め）すべてが新しいため、様々な場面で混乱が起こりやすい。適した環境が整えられているか、また職員間の連携が十分にとれているかを見直しながら実践していくことが必要である。

## ③ 問題解決のために実践したい内容

- ・子どもが不安を感じたり、落ち着かなかったりする時の要因を探りながら、保育室の物的環境を見直し、必要に応じて整備していく。また、子どもの欲求を十分に受容し、自分から「～しよう」と考えて生活できるような温かい関わりを保育士がしていけるように、保育士間で日々の保育を振り返り、話し合い、学び合いながら、連携して実践に繋げていくようにする。

以上のことを踏まえ、担当保育士が園内研修計画（表1）を作成した。それに基づき、毎月の保育カンファレンスで人権保育の視点から話し合った。また、エピソード記述を書くことにより、子どもの内面を知り、子どもの欲求を十分に受容することに努めた。そうすることで、6月頃からは、保育士との信頼関係を築くことができるようになり始め、それが子どもの安心に繋がり、自己主張もできるようになってきた。しかしながら、子どもたちは、排泄、手洗い、食事、入眠などを、保育士の促しによって、自ら進んで行動するまでには至っていない。そこで、この状況の改善を目指して、9月に公開保育を行った。

## 3. 保育実践

### (1) 午前の遊び終了から食事までの実践1：9月の実践

午前の遊びを終了し、保育室入室から食事までの流れは、プール遊びの期間（7月～9月中旬）が終了したことにより、身の回りの始末の仕方が変わり、まだ見通しを持って混乱している子どもたちがいる。子どもたちが身の回りのことを、自分でやろうとするには、どのような関わりや環境設定が必要なのかを明らかにするために公開保育を行った。

#### ① 入室から食事準備までに起きた混乱状況

前半に戸外遊びを終えて入室した子どもたち6名は、自ら行おうという気持ちが強く、見通しを持つこともできていた。しかし、後半の子どもたち6名は、バラバラと入室することになってしまったため、見通しが持てずになかなか給食の準備に向かう

## 午前の遊び終了から食事までの部分案（1）

平成 27 年 9 月 30 日（水） 2 歳児 ぶどう組 担任：保育士 A・B  
12 名（男児－4 名 女児－8 名 うち障害児－0 名）

<b>人権保育の視点</b>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもの気持ちを大切に、個々に合わせた適切な援助を行う。</li> <li>・子どもが自分でできる喜びや自信を持てるようにしていく。</li> </ul>		
<b>今期のねらい</b>		保育士に見守られながら、自ら簡単な身の回りのことをしようとする。		
<b>今日のねらい</b>		入室から給食までの一連の身の回りのことを、保育士に促されながら自分でやろうとする。		
<b>視点の具体化内容</b>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもの様子に合わせて、きめ細やかな援助やわかりやすい言葉かけで、自分でしようとする気持ちを育てる。</li> </ul>		
時間	保育の実際活動の流れ	環境構成	予想されるこどもの活動	援助活動・配慮事項
11:10	<ul style="list-style-type: none"> <li>&lt;入室&gt;</li> <li>・排泄</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・着替えはかごに入れ、取りやすい所に置く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・タオル、脱いだ衣服を汚れ物袋に入れる。</li> <li>・トイレで排泄する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全体の子どもの動きを把握し、保育士同士の連携を取り、役割分担をしながら援助や環境を整えていく。</li> </ul>
11:20	<ul style="list-style-type: none"> <li>・着替え</li> <li>・手洗い</li> <li>・食事</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・泡石鹸を出す。</li> <li>・机拭き、床拭き、バケツを用意しておく。</li> <li>・保育士は給食用エプロン、三角巾をつける。</li> <li>・机を拭き、エプロンを配る。</li> <li>・給食を配膳する。</li> <li>※アレルギー食の確認をし、確実にアレルギー児に配膳する。</li> <li>・口拭きタオルを水で濡らし、配る。</li> <li>・デザート、おかわりを配膳する。</li> <li>・午睡準備をする。（布団を敷く）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・着替えかごから、着替えを出して着ようとする。</li> <li>・手を洗う。</li> <li>・着席して、エプロンをする。</li> <li>・保育士に配膳してもらう。</li> <li>・食前の挨拶をし、食事をする。</li> <li>・横を向いたり、食べこぼしが多い子がいる。進んで食べられない子がいる。</li> <li>・食後の挨拶をし、タオルで口と手を拭く。タオルとエプロンは汚れ物袋に入れる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・次の活動を知らせたり、友達の姿に気づけるよう声をかけたりして、自ら見通しを持って、進んで行えるようにする。</li> <li>・着替えは、わかりやすく仕方を知らせ、自分で行えるよう見守ったり、援助する。上手くできたことは褒め、喜びや自信に繋げていく。</li> <li>・手洗いは、石鹸を使うよう伝えて見守り、必要な子どもには個別に援助する。</li> <li>・挨拶を促し、自ら進んで食べられるような声かけをしていく。</li> <li>・食事のマナーを身に付けていけるような援助もしていく。（特に座り方、姿勢）</li> <li>・保育士も一緒に食卓につき、楽しい雰囲気のできるように働きかける。</li> <li>・タオルで口や手をきれいに拭けているか、また衣服が汚れていないかを見て、必要に応じて援助する。気持ちよく午睡ができるようにする。</li> </ul>

ことができなかった。保育士Aが、給食の準備をしながら、その後半の子どもたち数名にも対応することになり、前半の子どもたちを待たせてしまう時間が長くなってしまった。また、一人ひとりを丁寧にみるのが難しい状況になった。全員が席に着いたことで、一旦は終息した（図1）。

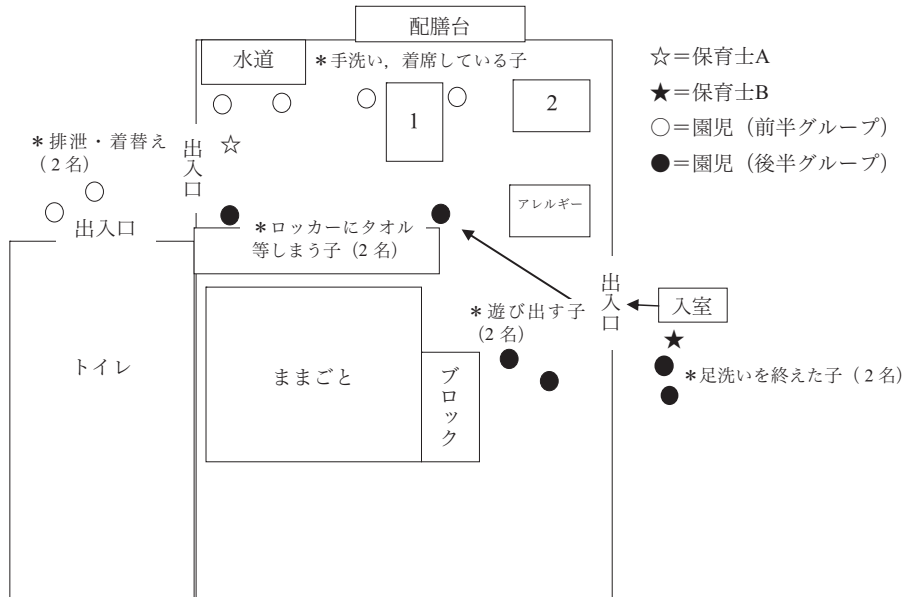


図1. 後半グループ入室から食事準備まで

このように、ねらいの「保育士に促されながら自分でやろうとする」という点では、保育士自身が全員の子どもの動きに目を配ることができなかったため、子ども一人ひとりに適切な促しが十分にできなかった。環境設定の仕方や保育士間の連携もスムーズにできなかった。

## ② 食事中に起きた混乱状況

全員が給食を食べ始め、落ち着いた時を見計らって、保育士Bが午睡の布団を敷くようにした。しかし、その間におかわりする子どもがたくさんだったり、遊び出す子どもがいたり、なかなか食が進まない子ども等がいたりすると、一人の保育士の対応では細かなところまで見て援助することが困難になってしまった（図2）。

①と同様に、保育士間の役割分担と連携がスムーズにできなかったことで、子ども一人ひとりに目を配ることが困難な状況になってしまった。布団を敷くのは、食べ終わるのが早い子どものものから敷き、様子を見ながら保育士間で言葉を掛け合い、臨機応変に対応することが必要であった。この実践について、保育カンファレンスでは以下のような意見が寄せられた。

- ・入室から食事準備までの流れは、後半グループが見通しを持っていなかった。まともに入室できると、見通しが持てるような援助がもっと一人ひとりにできたのではないかな。

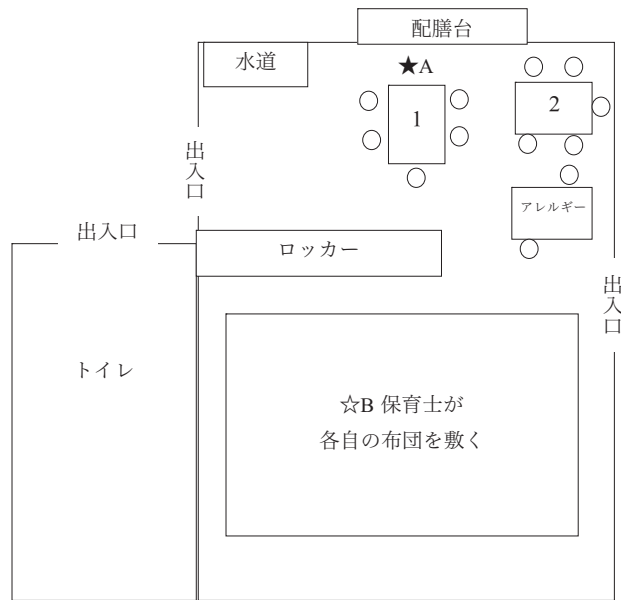


図2. 食事の状況

- ・食事は、進んで食べようとする雰囲気作りができていたと思う。しかし、マナー面においては、援助が必要な子が多かった。マナー面においても、意欲的にできるような声掛けをしていくと、もっと良かったのではないか。
- ・食事の挨拶が進んでできない子に対しての声掛けが一人ひとりにできていなかった。
- ・一人が布団を敷いている時に、子どもたちへの対応が見切れていなかった。布団を敷くタイミングの工夫ができるといいのでは。また、子どもに付く保育士の位置を検討してみてはどうか。子どもの席替えも含めて。
- ・食事を終えた子どもたちが、進んで身の回りの片づけを済ませ、午睡準備が落ち着いてできていたのは良かった。自分の布団が安心できる場所になっていた。
- ・子どもが「自分でできた」という実感がもてるような援助が大切だと思う。

これらを踏まえ、以下の課題①～③を設定した。

- ①個々に合わせて適切な援助ができるように、一人ひとりの動きに目を配れる体制をとっていく。そのための環境設定や保育士の連携を見直す。特に、食事の際の準備の仕方、タイミング、役割分担を考える。また、子どもの机の配置、席順を検討する。
- ②子どもが「自分でできた」という実感を得意いけるような援助、言葉がけをしていく。そのためにも、保育士自身が環境設定の準備等で慌ただしくならないよう、ゆとりを持つ工夫をしていく。
- ③次の活動に移る際、子どもの待つ時間が長くなってしまった。環境設定の見直し以



外にも子どもが見通しを持ってずに「待つ」という感覚ではなく、楽しく移行していきけるような言葉がけや、やり取りを考えて進める。

(2) 午前の遊び終了から食事までの実践2：11月の実践

実践1での課題①、②を踏まえ、まずは机の配置、子どもの席の位置の見直しを行った。図3に示すように、机の配置は、保育士の動線がスムーズに行くことと、2人の保育士がどちらも全体を見渡せる位置につくことを考えて変更した。子どもの席順は、予想される援助を考え、2人の保育士の役割分担も考慮して決めた。

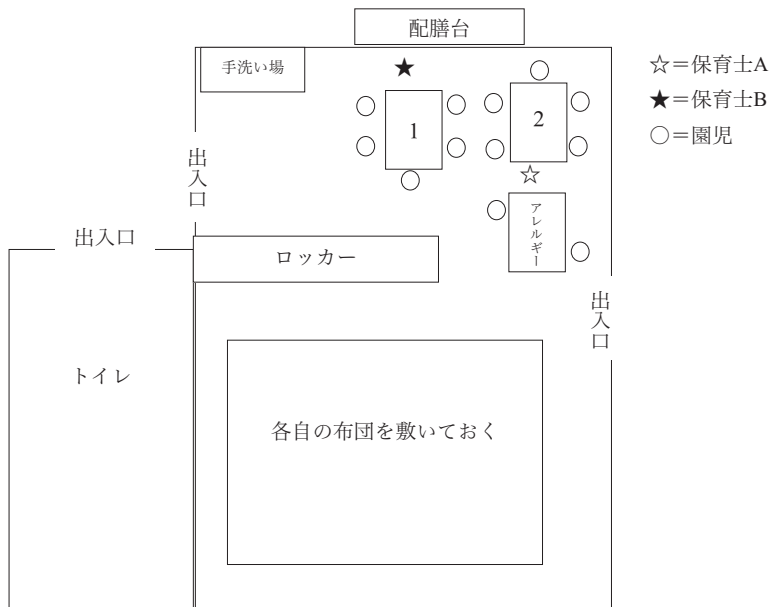


図3. 食事時の保育士の配置

保育士の役割分担は、保育士Aが基本的に全体の活動を進め、保育士Bは主体的に生活を進めていくことに混乱している子どもたちの対応をすることにした。食事準備では、保育士Aが配膳を行い、保育士Bが子どもの着席までを促す。食事の際は、保育士Bが午睡の準備とおかわり配膳をし、保育士Aは全体を見ながら食べ終わった子どもを午睡に促す。

このような見直しを通して、10月中旬頃からは、子どもたちは一日の生活の見通しを持ち、身の回りのことを自分でやろうとする姿が見られるようになってきた。しかし、場面によっては、遊びの切りがつけられずに、次の活動へ移行できないことがある。10月27日に参加した名古屋市人権保育研修会のグループ討議での意見を参考にした課題③の工夫を保育士間で話し合い、実践2を行った。

環境設定と保育士の役割分担を見直すことで、前回のような混乱は見られなかった。しかしながら、公開保育で普段とは違う大人が見ていることに不安を感じ、泣き

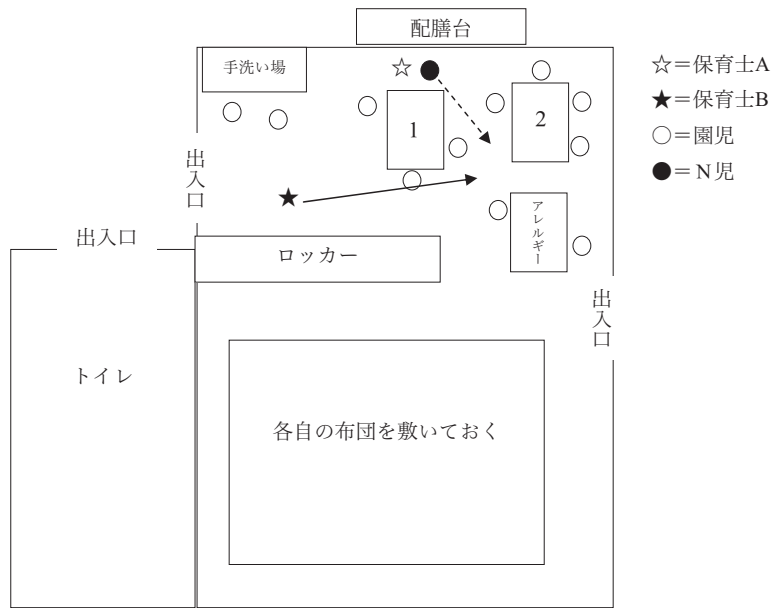


図4. N児への対応のための配置変更

出したN児がいたため、保育士間で柔軟な対応をした。図4に示すように、N児は、配膳を進めていた保育士Aの側にずっとついていった。保育士Aは、排泄援助を終えて入室した保育士Bに声をかけ、N児が安心できるように付き添ってもらった。N児は保育士Bが側にいることで安心し、泣き止んで食事をすることができた。保育士Aは、配膳とともに手洗いをしている子どもにも目を配るようにした。役割分担の見直しをすることは、給食の配膳や午睡の布団敷きを子どもの様子を見ながら、どのようなタイミングであるかというスムーズな連携に繋がった。

保育士の動きを整理し、環境設定を見直したことが保育士自身の気持ちのゆとりにつながり、それが、子ども一人ひとりの動きに目を配ることができるようになった。そして、個々の発達に合わせた援助も以前よりはできるようになった。子どもが主体的に「やってみよう」と思い、身の回りのことをする姿も増えてきた。「子ども一人ひとりを大切に」という具体的なこととして、まずは子ども一人ひとりの動きに目を配る体制を保育士間で作ることを課題としてきた。それに関しては、今回の公開保育に至るまでに見直しができ、以前よりも子どもの細かい動きに目を配り、それに対する援助もすることができるようになってきた。以上のことを、保育カンファレンスで報告し、全保育士で情報共有した。

#### 4. 全体の考察

今回の園内研修と2つの保育実践を通して、「子ども一人ひとりを大切にする保育」を目指すことは、「保育士が子どもを把握し、見通しをもって保育をしていく」とい



う保育の基本に立ち返ることであることを学んだ。そして、それを実現化していくためには、保育士間の真の連携の重要性を痛感した。

開園間もないということは、連携が重要になる乳児保育の現場において、既存の環境の中での子どもの行動の予測が立ちにくかったり、このことから、保育士間に混乱が生じたりすることがあることを知った。そこで、2歳児保育の生活習慣の自立を援助する方法も保育士を含めた環境の整備が必要であることがわかった。子どもの動線の予測を立て、環境を整備することにより、子どもたちが主体的に行えるようになった。環境の整備をすると保育士が不用意に言葉をかけたり、保育士の動きにより、子どもたちが落ち着かない雰囲気になったりすることはかなり少なくなった。これは、担任保育士同士がその場の状況を把握し、基本の役割分担に捉われることなく、保育士間の連携で柔軟に対応することができるようになったからである。保育の中では何気に行われていることではあるが、保育士間の信頼のもとでの役割分担、個々の発達を踏まえて保育士が臨機応変に対応していく柔軟性が必要であることの再確認をした。

## 5. 今後の課題

本研究を始めた当初は、保育カンファレンスで出た意見に対して「一生懸命にやっているのにわかってもらえない」、「悔しい」、「悲しい」のような負の気持ちになる保育士が多かった。カンファレンスを繰り返すうちに「言われて気づくことができた」、「意見を受け入れられるようになった」、「他のクラスへの意見を自分のクラスに置き換えて考えられるようになった」と他の保育士の意見を受け入れ、前向きに捉えるようになっていった。それは、園内公開保育が誰のために、何のために行っているかを一人ひとりが理解できたからだと思う。それは、今回の一連の研修活動の中で醸成された大切な保育士の資質であり、保育園の財産であると考えている。

今後もこのような園内の公開保育を繰り返しながら、一人ひとりを大切にする保育実践を積み重ねるため、子どもに柔軟に対応できる保育士の立ち位置と役割分担について考えていきたい。

### ■引用文献

厚生労働省：保育所保育指針

<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/hoiku04/pdf/hoiku04a.pdf> (2016年1月3日閲覧)

厚生労働省：児童福祉施設の最低基準の設備及び運営に関する基準

<http://law.e-gov.go.jp/htmldata/S23/S23F03601000063.html> (2016年1月3日閲覧)

森上史朗・柏女霊峰 編 (2015) 保育用語辞典第8版, ミネルヴァ書房

名古屋市健康福祉局：名古屋市保育所人権保育指針

<http://homepage3.nifty.com/kasadera/rights/policy.pdf> (2016年1月3日閲覧)